長期戦略:テーマ　「 教員個人・組織の教育力向上」

提出日　2022 年　8 月　24 日

担当部署

Ⅱ.実施計画帳票

長期戦略テーマの責任者（統轄部署）	小谷高等教育推進センター長（高等教育推進センター）	実施計画の担当部署	教務機構

1. 実施計画

実施計画（タイトル）		取組開始	達成状況確認年度	学部・研究科での取組み有/無	帳票
1-(12)-⑧	シラバスの実質化	2019 年度	2024 年度	必要⇒【必須型】（全学部または全研究科での取組みが必須）	不要

内容

組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによって CP や DP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化の一環として、各回の授業外学修習課題をシラバス上で明記するよう推奨していくことで、授業外学修時間の増加につながる。

進捗状況を測る指標	指標名	定義・算式
指標1	4 月 1 日までにシラバスの第三者チェックを実施した学部・研究科数	4 月 1 日までにシラバスの第三者チェックを実施した学部・研究科数
指標2	シラバスにおいて各授業回に対する「授業外学修課題」を明記している授業科目数（クラス単位）の割合	（各回の「授業外学修」（仮称）欄に予習・復習等の課題が記載されているクラス数）÷（全クラス数） ※参考　2019 年度（新型コロナウィルス感染症拡大前）の達成率 学部　16.1%　大学院前期・専門職　12.4%
指標3		

目標1＜指標1＞4 月 1 日までにシラバスの第三者チェックを実施した学部・研究科数

	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
目標	9 学部 11 研究科	9 学部 11 研究科	15 学部 14 研究科	15 学部 14 研究科	14 学部 14 研究科 （理工学部は対象外）	14 学部 18 研究科 （理工学部は対象外）
実績	11 学部 14 研究科	15 学部 14 研究科	15 学部 14 研究科			

目標2＜指標2＞シラバスにおいて各授業回に対する「授業外学修課題」を明記している授業科目数（クラス単位）の割合

	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
目標	－		学部　25%（+8.9P） 大学院前期・専門職 15% (+2.6P)	学部　28% (+11.9P) 大学院前期・専門職 18% (+5.6P)	学部　31% (+14.9P) 大学院前期・専門職 21% (+8.6P)	学部　34% (+17.9P) 大学院前期・専門職 24% (+11.6P)
実績	学部　33.9%(+17.8P) 大学院前期・専門職 19.4%(+7.0P) ※コロナ対応有り	学部　29.3%(+13.2P) 大学院前期・専門職 19.3%(+6.9P) ※コロナ対応有り	学部　32.7%(+16.6P) 大学院前期・専門職 22.1%(+9.7P) ※一部、コロナ対応有り			

目標3＜指標3＞

	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
目標						
実績						

2. ロードマップ

		2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
シラバスの実質化	策定段階	学部等に現状調査	学部等への調査	学部等への調査	学部等への調査	学部等への調査
	2023 年 3 月末段階	—	—	—	—	—
		2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	-
	策定段階	学部等への調査	学部等への調査	学部等への調査	学部等への調査	
	2023 年 3 月末段階	—	—	—	—	
		2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
	策定段階					
	2023 年 3 月末段階					
		2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	-
	策定段階					
	2023 年 3 月末段階					

3. 費用計画・人員計画

【費用・人員を必要とする理由】							
非公開							
経費　単位:万円	2019 年度　承認	2020 年度　承認	2021 年度　承認	2022 年度　承認	2023 年度　承認	2024 年度	左記以降
非公開							
人員・人件費　単位:万円	2019 年度　承認	2020 年度　承認	2021 年度　承認	2022 年度　承認	2023 年度　承認	2024 年度	左記以降
非公開							

４．進捗状況･得られた成果

2018 年度	2019 年度シラバスより、高等教育推進センターと協力し、「シラバス作成の手引き」を作成し、併せて、「主な教授言語」･「授業目的（英文）」･「到達目標（英文）」･「授業の概要・背景」の４項目を追加したことで、シラバスの精緻化を進めることができた。 また、第三者チェックについては、全ての項目を対象とし、各部署へ基準等の制定も含めてチェックの依頼をした。
2019 年度	2019 年度シラバスの第三者チェック状況を各部課に調査する予定（FD 部会等で共有するかは未定） 2019 年度シラバスおよび 2020 年度シラバスの第三者チェック状況について各部課に調査を実施した結果、各部課所属の専任教員がチェックを行い、シラバス記載内容に不備があれば該当者に修正するよう対応を求め、最終的に会議体で実施状況の報告を行う等、組織として対応していることが分かった。
2020 年度	新型コロナウイルス対応により、対面からオンライン形式（オンデマンド動画またはビデオツール使用による同時双方向型）への形態変更、また成績評価方法の変更（平常評価や Web、メールを利用した授業中試験の多用）を余儀なくされ、結果として学生の授業外学修時間が大幅に増加した。これは、①履修者がオンライン授業内容の確認のために頻繁にシラバスを見ていた、②各回、細かく授業用資料および学修課題が提示された、③定期試験や定期レポートが実施できないことにより、平常評価での成績評価が多用され、日頃から平常レポートや授業中試験に取り組むこととなり、準備の度合いが増したことなどに起因すると推測される。授業外学修内容の提示が各回に明確化されたことにより、シラバスが本来の機能を果たし、学生の授業外学修時間の増加に好影響を及ぼしたと考える。 また、シラバスの第三者チェック状況については、実施 4 年目となり、各部課のルーティン業務として組織的な対応が定着している。
2021 年度	新型コロナウイルス対応により、2020 年度に引き続き、オンライン形式を主とした授業開講、成績評価方法の運用を余儀なくされ、結果として、学生がシラバスを注視する機会が多い状況にあった。そのようななかで、「授業形態（緊急時）」欄の設置や、対面授業取り止め時にシラバス上部にアラート表示させ、学生により精緻に通知できるよう対応した。2022 年度シラバスの作成時には、授業外学修欄に授業外学修時間の目安も明記するよう依頼し、教員へ記入の意識づけを図った。また、「学位授与の方針との関連」欄を新設し、CP や DP との関連性を学生に示した。第 3 者チェックは実施 5 年目を迎え、組織的に定着しており、活動制限レベルの変更に伴うオンライン関連項目（授業形態（オンライン受講許可学生）等）の対応に対してチェックを行う学部もあり、有効に機能している。 ※シラバスの表記について、2022 年度より、「授業外学習」から、「授業外学修」へと変更した。
2022 年度	
2023 年度	

５．今後の課題及び方向性

2019 年度	2019 年度からは「授業目的（英文）」･「到達目標（英文）」の２項目についても必須項目となるため、その点について重点的にチェックする必要がある。
2020 年度	調査を実施することで、各部課での第三者チェックの実施を促す効果もあると考えられるので、引き続き、第三者チェック状況について調査をしていくことが有効である。また、授業外学修時間の確保のため、まずはシラバスの各回の「授業外学習」欄に記入してもらうよう促すことでシラバスの更なる精緻化を目指す。将来的には、学生が授業外学習をした成果を教員が評価する仕組みの検討も必要である。

2021 年度	オンライン授業により、昨年度（2020 年度）は各回の授業外学習課題の提示、授業外学習欄への記入率が亢進した。学生もシラバスを熟読のうえ授業に臨んでいたことが、各種調査の結果からも裏付けられる。今後（特にポストコロナ、対面授業再開後）、継続して学修時間を確保できるよう、シラバスの「各回の授業外学習」の必須入力化や、授業外学習に対して教員がフィードバックする仕組みについて、引き続き、検討を進める必要がある。 また、定着化が見られる第三者チェックに関しては、シラバスの改修による入力項目の増減や、「各回の授業外学習」の必須入力化といった周辺環境の変化に応じて、重点チェック項目を変える等、第三者チェックを活かして確実にシラバスの実質化が図れるような仕組み作りが求められる。
2022 年度	2022 年度より本格的に対面授業再開となったが、シラバスの各回の「授業外学修」欄または科目全体に対する「授業外学修」欄への入力は教員にも浸透してきており、指標 2 で報告の通り増加傾向にある。また、各回の「授業外学修」欄に記載が無く、かつ科目全体に対する「授業外学修」欄にも記載のない授業は 2 件のみで、ほぼすべての教員が何らかの形で授業外学修について学生へ指示している。2022 年度シラバスでは、授業外学修欄への記載だけでなく、授業外学修時間の明記についても依頼したが、学修時間の記載は一部の教員にとどまっている。引き続き、各回の「授業外学修」欄への入力、加えて、授業外学修時間の明記を促進する仕組み作りが求められる。 ※シラバスの表記について、2022 年度より、「授業外学習」から、「授業外学修」へと変更した。
2023 年度	
2024 年度	

6. 学院総合企画会議の基本方針

2018 年度	保留とします。2018 年度に教育研究活性化資金等を用いて行う予定のシラバス整備（日英併記に係る英訳、英文校閲、第三者チェック）の実施結果、効果検証を踏まえた上で、今後も引き続き外部委託によるシラバス整備が必要と判断する場合は、将来構想推進 WG での承認を得た上で、予算外申請してください。
2019 年度	外部委託による第三者チェックの実施については、保留とします。2019 年度分シラバス整備の効果検証を踏まえ、今後も引き続き必要と判断する場合は、将来構想推進WGでの承認を得た上で、予算外申請してください。
2020 年度	外部委託による第三者チェックの実施については、保留とします。シラバス整備の効果検証を踏まえ、引き続き必要と判断する場合は、将来構想推進WGの了承を得て、予算外申請してください。
2021 年度	システム保守費等を認めます。外部委託による第三者チェックの実施については、保留とします。シラバス整備の効果検証を踏まえ、必要と判断する場合は、将来構想推進 WG の了承を得て、予算外申請してください。
2022 年度	システム保守費を認めます。 外部委託による第三者チェックの実施については、これまでの運用実態のとおり、各学部運営において実施してください。

7. Total Review の結果

【フェーズⅠ(2019～2021)】

レビュー結果	可　否	備　考 (継続:「フェーズⅡに向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
・シラバスの第三者チェックを各学部にて実施している。ルーティン業務として取り組んでいる学部が多い。 ・上記 1-(12)-④シラバスの改良と合併させて、さらなるシラバスの高度化をめざす必要がある。	継続 ・ 廃止	・同左(引き続きシラバスの実質化に向けた取組が必要)

【フェーズⅡ(2022～2024)】

レビュー結果	可　否	備　考 (継続:「フェーズⅡに向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
	継続 ・ 廃止	